岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第162号（2016）41－46

ぬいぐるみお泊まり会の効果と子どもの読書活動傾向

岡崎　善弘　・　浅川　淳司*・　大田　紀子**

ぬいぐるみお泊まり会の効果とぬいぐるみお泊り会に参加を希望する子どもの読書活動傾向について調べた。参加する子どもは公募で集められた。読書活動の増加量を参加群と非参加群で比較した結果，２群間の増加量に有意な差はなかった。さらに，事前の読書活動傾向を２群間で比較した結果，参加群の読書活動傾向は非参加群よりも有意に高かった。本研究の結果は，読書活動傾向の高い子どもがぬいぐるみお泊り会に参加しやすい傾向にあることを示しており，読書活動傾向が高くない子どもが参加できる募集方法の必要性を示唆した。

Keywords：ぬいぐるみお泊り会，読書活動，絵本，幼児，ファンタジー

問題と目的

ぬいぐるみお泊り会はアメリカのペンシルバニア州の公共図書館で始まったと言われている。ぬいぐるみお泊り会が2007年１月の新聞記事に紹介されており，「昨年の夏に行われていた公共図書館のプログラムからアイデアを得た」と記載されていることから（Pittsburgh Post-Gazette, 2007），2006年頃にはすでに同様のプログラムがあったと思われる。日本では，国立国会図書館が2010年９月に「カレントアウェアネス・ポータル（注1）」でぬいぐるみお泊まり会を紹介しており，2010年12月に宝塚市立西図書館でぬいぐるみお泊まり会が開かれている。

ぬいぐるみお泊まり会は，お気に入りのぬいぐるみを図書館に宿泊させることを通して図書館や本を身近に感じてもらう活動である。ぬいぐるみお泊まり会では，子どもが図書館にぬいぐるみを預けて帰った後，ぬいぐるみたちが絵本を読んでいたり，他の仲間たちと一緒に遊んだりしている場面の撮影が行われる。そして，翌日以降，ぬいぐるみを迎えに来た子どもに写真と絵本が手渡され，この絵本はぬいぐるみが読んでいたと伝えられる。このような体験は子どもの読書活動を促進させるのではないかと期待されており，各都道府県の図書館でぬいぐるみお泊まり会が行われるようになった。しかし，ぬいぐるみお泊まり会が子どもたちの読書活動の向上に貢献しているかどうかは検証されておらず，効果は明らかになっていない。そこで，本研究は，ぬいぐるみお泊まり会が幼児の読書活動を増加させるのか検討した。

読書は子どもたちの成長において重要な活動として位置づけられている。例えば，経済協力開発機構（OECD）は，読む能力として，読解リテラシー（reading literacy）を国際的な指標としている。読解リテラシーとは，自らの目標を達成し，自らの知識と可能性を発達させ，効果的に社会に参加するために，書かれたテキストを理解し，利用し，熟考する能力である（Shleicher & Tamassia, 2000）。読解リテラシーを育むために，文部科学省（2006）は「読解力向上に関する指導資料」を策定し，小学校から読解リテラシーの育成が取り組まれるようになった（例えば，須藤・安永，2009；須藤・安永，2011）。子どもの頃の読書活動は，成人時の読書活動にも影響を与えることが報告されており（国立青少年教育振興機構，2012），秋田（1992）は，蔵書数や保護者自身が読書行動を示すことよりも，絵本を読み聞かせたり，図書館や本屋に連れて行くなど，読書を通して子どもと直接関わる方が，子どもの読書に対する感情（読書への好意度，読書意欲）に強く影響

岡山大学大学院教育学研究科　心理・臨床学系　700－8530　岡山市北区津島中３－１－１
*金沢大学人間社会研究域学校教育系　920－1192　石川県金沢市角間町
**山口学芸大学　754－0032　山口県山口市小郡みらい町１－７－１

The effect of stuffed animal sleepover and children's reading habits

Yoshihiro OKAZAKI, Atsushi ASAKAWA*, and Noriko OTA**
Division of Psychology and Clinical Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530
*Kanazawa University College of Human and Social Science, Kakuma, Kanazawa, Ishikawa, 920-1192
**Faculty of Education, Yamaguchi Gakugei University, 1-7-1, Miraimachi, Ogori, Yamaguchi, 754-0032

することを報告している。

読書リテラシーの育成が中心となった読書教育が2000年頃から政策として掲げられたことの影響もあり，読書の好意度や読書意欲を向上させる活動は家庭の外でも行われるようになった。例えば，「子ども読書年」となった2000年には，イギリスで行われているブックスタートが国内で広く紹介されている。ブックスタートとは，絵本を開いて楽しむ体験を赤ちゃんと保護者間で共有してもらう活動であり，市区町村自治体の活動として，０歳児検診などで実施されている（中村・南部, 2007）。ブックスタートの経験は，小学校入学後の生活習慣や学力に影響する可能性が示唆されている。例えば，ブックスタートを乳児期に経験した子どもは，経験していない子どもより読書習慣が高く，ゲーム習慣が低かったことが報告されていたり（森・谷出・乙部・竹内・高谷・中井，2012），読んだり書いたりする言語的な能力だけでなく，計算や図形認識といった数学的な能力にも影響することも報告されている（Wade & Moore，1998）。

近年では，２歳頃から12歳頃までを対象とした，ぬいぐるみお泊まり会（stuffed animal sleep-over）がアメリカを中心に広がっている。図書館や読書に関心を持ってもらうことを主な目的としており，「図書館に宿泊させたぬいぐるみたちが夜になると図書館内を探検した」というストーリーが子どもたちに紹介される。ぬいぐるみお泊まり会の実施方法は各図書館によって多少は異なっているが，一般的には，⑴ぬいぐるみと一緒に絵本のお話を聞いてもらい，⑵ぬいぐるみを預かり，⑶閉館後にぬいぐるみが絵本を読んでいる場面の写真を撮影し，⑷後日のぬいぐるみの返却と同時に，⑶で撮影した写真とぬいぐるみが読んでいた絵本を紹介する，という順番で実施されていることが多い。また，絵本を紹介する際，大切にしているぬいぐるみが選んだ絵本であることが子どもに伝えられる。ぬいぐるみお泊まり会の重要な部分は，大切にしているぬいぐるみが絵本を選んでくれたという体験であり，この体験が読書への感情の高まりや読書活動の増加につながると期待されている。そこで，本研究では，一般的に広く行われている方法でぬいぐるみお泊り会を行い，読書活動に与える効果について検討する。

研究１

ぬいぐるみお泊まり会は，読書活動の促進を目的としているため，読書活動がすでに高い子どもではなく，読書活動が少ない子どもに参加させることが必要である。しかし，一般的に行われているぬいぐるみお泊まり会は，保護者が参加を決定し，子どもを連れて行くイベントであることから，読書を重要視する保護者のもとで育っている子どもたちの参加割合が高いと予想されるため，ぬいぐるみお泊まり会に参加する子どもたちの読書活動は相対的に高いと考えられる。したがって，本研究の事前調査として，ぬいぐるみお泊まり会に参加を希望する子どもの読書活動は，お泊まり会に参加しない子どもに比べて高いのか検討する。

ぬいぐるみが動くことは本来起こり得ないことであるため，子どもが疑ってしまう場合には効果は期待できない。このような空想と現実の区別は，３歳頃から６歳頃にかけて急速に発達することが報告されており（富田・原，2006），低年齢の子どもの方が，空想を現実として受け止めやすく，ぬいぐるみが絵本を選んでくれたことを受け入れやすいと予想される。このことから，本研究は３，４歳児を対象とする。

方法

参加者

参加群22名（平均月齢47.1ヶ月（$SD = 4.7$ ヶ月），男児6名，女児16名），非参加群29名（平均月齢48.8ヶ月（$SD = 2.5$ ヶ月），男児15名，女児14名）が本研究に参加した。参加群１名と非参加群５名は，回答に不備があったため，データから除外した。

読書活動の調査

読書活動傾向尺度　子どもの読書活動について，１週間あたりの頻度を５件法（5.毎日行う，4.１週間に５，６回，3.１週間に３，４回，2.１週間に１，２回，1.全くない）で保護者に尋ねた。質問項目は，読み聞かせを要求する回数，図書館に行く回数，絵本を借りたいという回数，絵本に関する会話，自分から絵本を開く回数，本屋に行きたいという回数，本の購入を要求する回数，絵本を持ち歩く回数の合計８項目だった。

結果

参加群と非参加群の事前の読書活動傾向の尺度得点を図１に示す。ぬいぐるみお泊まり会に参加を希望する子どもは，参加していない子どもよりも読書活動傾向が高いのか調べるために，対応のないt検定を行った。その結果，尺度得点は非参加群よりも参加群の方が有意に高かった（$t(42) = 2.65, p < .05$）。

研究２

研究２の第１の目的として，ぬいぐるみお泊まり会を実施し，読書活動が増加するか検討を行う。また，ぬいぐるみお泊まり会に読書活動促進の効果が

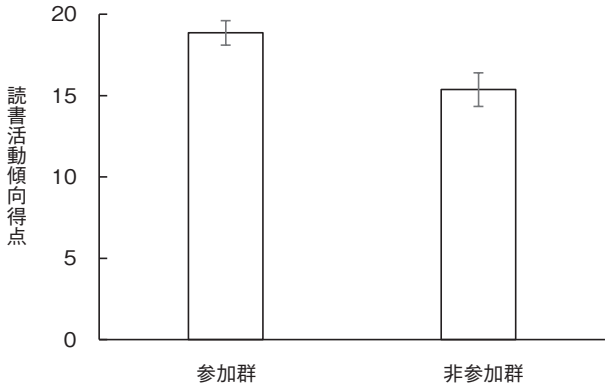

図1.　事前における各群の読書活動傾向得点

あるのであれば，単に絵本が与えられた子どもより，ぬいぐるみお泊まり会の参加を通して絵本を与えられた子どもの方が絵本を開く回数は多いと予想される。研究２の第２の目的として，読書活動に参加した子どもは，参加しなかった子どもよりも，与えられた絵本を開く回数が多いのか検討する。ぬいぐるみお泊まり会は，一般的には図書館で開催されるため，ぬいぐるみが子どものために持ち帰ったとされる絵本は約１週間の貸し出し期間内に返却しなければならない。長期的に効果を検証するためには１週間では不可能であるため，本研究では，絵本の貸し出し期間を１ヶ月とした。

方法

参加者

参加者は研究１と同じであった。参加群22名（平均月齢47.1ヶ月（SD = 4.7ヶ月），男児6名，女児16名），非参加群29名（平均月齢48.8ヶ月（SD = 2.5ヶ月），男児15名，女児14名）が本研究に参加した。

ぬいぐるみお泊まり会

本の種類や所蔵冊数が多いほど多様な写真を撮影することができることから，本研究では，ぬいぐるみお泊まり会は岡山市内の書店で行った。また，ぬいぐるみお泊り会は，書店が入っているビルの会議室で２日間に分けて行われた。

１日目　書店が入っているビル内の会議室に親子で集まってもらった。子どもたちの注意を向けるために，司会者が手遊びを最初に行った。子どもたちの注意が向いたことを確認した後，２冊の絵本の読み聞かせを行った。次に，夜になるとぬいぐるみたちが書店に遊びに来ている様子をスライドで紹介し，子どもたちのぬいぐるみも夜の書店で遊びたいと思っているかもしれないと伝えた。子どもたちにぬいぐるみを泊まらせても良いかどうかを確認した後，子どもたちのぬいぐるみを預かった。その後，魔法使いが現れ，魔法をかけるとぬいぐるみが動き出す劇を見せた。最後に，子どもたちにぬいぐるみに布団をかけてもらい，明日，ぬいぐるみを迎えに来る時刻を確認して，１日目を終了した。

子どもたちが帰宅した後，ぬいぐるみたちが書店内を探検している様子の写真を撮影した（書店が閉店している時間を利用）。撮影時には，スタッフを２班（A班，B班）に分けた。A班は，ぬいぐるみたちが探検するストーリーを撮影した。ストーリーの構成は以下の通りである。⑴夜になるとぬいぐるみたちは次々に起きはじめた。⑵全員で書店内を探検していると，書店の主（フクロウ）に出会い，書店の主の悩みを解決することになった。書店の主の悩みは，散らかった本の整理整頓であった。⑶整理整頓を手伝ってくれたお礼として，ぬいぐるみたちは書店の主に絵本を読み聞かせてもらった。⑷ぬいぐるみたちは読み聞かせてもらった絵本をとても気に入り，家で子どもたちと一緒に読みたいことを書店の主に伝えた。⑸絵本がぬいぐるみたちの数と同じになるように，書店の主は魔法をかけて絵本を増やし，ぬいぐるみたちに１冊ずつプレゼントした。⑹ぬいぐるみたちは大喜びして，子どもと一緒に絵本を読むことを楽しみにしながら，最初にいた部屋へ戻っていった。撮影終了後，写真をパワーポイントで呈示できるように準備した。B班は，ぬいぐるみたちが書店内で遊んでいる様子を各場所で撮影した。B班が撮影した写真は２日目で利用する部屋に飾るため，当日にプリントアウトした。

２日目　１日目と同じように，手遊びを最初に行った。次に，ぬいぐるみたちが探検していた様子を，プロジェクターを用いて紹介した。その後，ぬいぐるみたちが遊んだ形跡が書店内に残っていると伝え，子どもたちと一緒に書店へ移動した。書店内には足跡が３つの場所に設置されており，子どもたちは，３つの足跡を探すことができたら会議室に戻ってくるように伝えられた。子どもたちが足跡を探している間に，B班が撮影した写真を壁一面に張り付け，預かったぬいぐるみを寝かせた。ぬいぐるみの傍には，子どものために持ち帰った絵本が置かれていた。

会議室に戻ってきた子どもの順番で，ぬいぐるみと絵本が手渡された。渡された絵本は，ぬいぐるみたちが気に入っていて，何度も読み聞かせてほしいと願っている絵本であることが伝えられた。また，非参加群の子どもたちには何も伝えずに絵本が幼稚園で配布され，同じ時期に読書活動の調査が行われた。

絵本　１日目の読み聞かせで用いた２冊の絵本は，「きょだいなきょだいな」と「まあちゃんのな

がいかみ」であった。どちらも読者に想像や空想を求める物語であることから，ぬいぐるみたちが探検する世界観に入り込みやすい絵本として選定された。また，ぬいぐるみたちが子どものために持ち帰った絵本は「なーちゃんとおおかみ」であった。子どもがまだ読んでいない絵本であること，親しみ易い絵本であること，書店や親から定評のある絵本であることの観点をもとに選定された。上記の３冊の絵本は，書店の絵本部門の担当者２名と共同研究者３名の合計５名の協議によって決定された。また，条件を統制するために，非参加群の子どもに与えられた絵本は参加群と同じ絵本とした。

読書活動の調査

読書活動傾向尺度　子どもの読書活動について，１週間あたりの頻度を５件法（5.毎日行う，4.２週間に５，６回，3.１週間に３，４回，2.１週間に１，２回，1.全くない）で保護者に尋ねた。質問項目は，読み聞かせを要求する回数，図書館に行く回数，絵本を借りたいという回数，絵本に関する会話，自分から絵本を開く回数，本屋に行きたいという回数，本の購入を要求する回数，絵本を持ち歩く回数の合計８項目だった。読書活動傾向の調査は，１週間後，１ヶ月後の２回行った。

ぬいぐるみが持ち帰った絵本を開いた回数と自由記述　１週間後と１ヶ月後の調査では，ぬいぐるみが持ち帰った絵本を開いた回数（上記と同じ５件法）と，保護者から見た子どもの読書活動に関する変化の自由記述も求めた。

結果

各群の読書活動傾向の尺度得点の変化量を調べるために，研究１の各群の読書活動傾向の尺度得点も含めて分析を行った。各群の読書活動傾向の尺度得点（事前，１週間後，１ヵ月後）と絵本を開いた回数（１週間後，１ヵ月後）を表１に示す。事前と１週間後および事前と１ヵ月後の読書活動傾向の尺度得点の変化量を図２と図３に示す。参加群と非参加群間で尺度得点の変化量に差があるか調べるために，対応のないt検定を行った。事前と１週間後の２時点で変化量を比較した結果，差は有意ではなく，事前と１ヵ月後の比較においても差は有意ではなかった（$t(42) = -1.84, p > .05; t(42) = -0.93, p > .05$）。

表1　読書活動傾向の尺度得点の平均値と絵本を開いた回数の平均値

		参加群（$N = 21$）		非参加群（$N = 24$）	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
	月齢	47.10	4.70	48.75	2.47
事前	読書活動傾向	18.86	3.44	15.37	5.05
１週間後	読書活動傾向	18.24	3.24	15.88	5.42
	絵本を開いた回数	2.48	1.25	2.38	1.06
１ヶ月後	読書活動傾向	18.64	3.97	15.92	5.44
	絵本を開いた回数	2.10	1.09	2.19	1.01

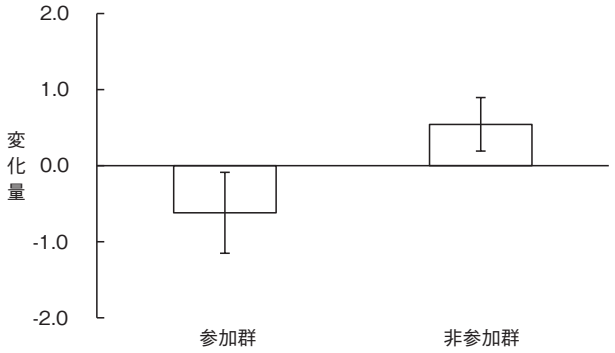

図2.　事前と1週間後の変化量

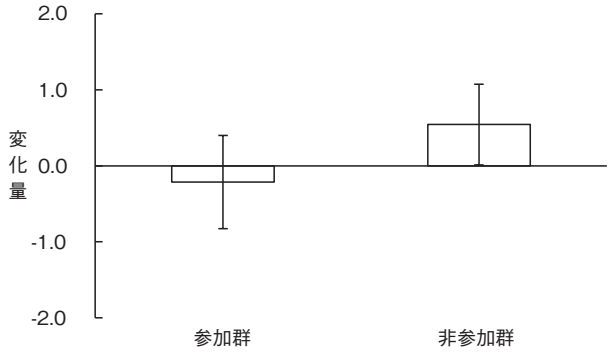

図3.　事前と1ヶ月後の変化量

プレゼントされた絵本を開いた回数を図４に示す。絵本を開いた回数が２群間で異なるか調べるために，対応のないt検定を行った。参加群の方が開いた回数は多かったが，１週間後と１ヵ月後のどちらも，２群間の差は有意ではなかった（$t(43) = 0.29, p > .05; t(43) = -0.29, p > .05$）。

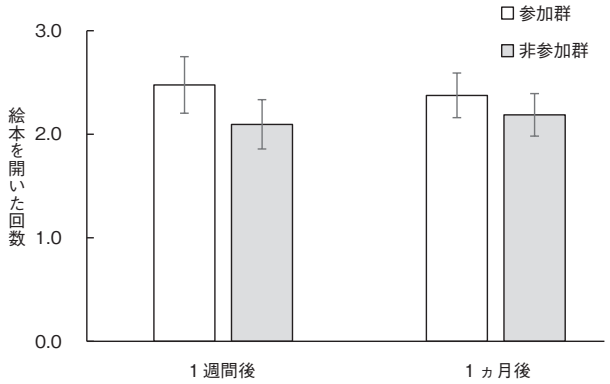

図4.　子どもが絵本を開いた回数

読書活動に関する変化の自由記述は９件であった（表２）。変化を報告した自由記述の内容は，「読み

聞かせの要求」,「自発的読書の増加」,「ぬいぐるみに読み聞かせる」の３タイプに分類された。選出および分類は共同研究者３名の協議によって行われた。

表２　ぬいぐるみお泊り会に参加した子どもの変化に関する自由記述

時期	読書活動に関する変化	タイプ
１週間後	「読んで」と言ったことのない絵本の読み聞かせを要求するようになった。	読み聞かせの要求
１週間後	あまり絵本をみる子ではないが，この1週間は寝る前に「絵本読んで」ということが増えた。	読み聞かせの要求
１週間後	空想の中で幼稚園の先生になってぬいぐるみに絵本の読み聞かせをするようになった。	ぬいぐるみに読み聞かせる
１週間後	今まで読むことがなかった絵本をもってきて，読んでほしい言ってくるようになった。	読み聞かせの要求
１週間後	以前から絵本は好きだったが，絵本を積極的に自分で読もうとすることがさらに増えた。	自発的読書の増加
１週間後	この1週間，持ち帰った絵本を何回も読み返していた。	自発的読書の増加
１週間後	絵本を見ている時もぬいぐるみを傍らに置いて，時々，ぬいぐるみに読み聞かせている。	ぬいぐるみに読み聞かせる
１ヵ月後	ぬいぐるみを並べて，ぬいぐるみに絵本の読み聞かせている時がある。	ぬいぐるみに読み聞かせる
１ヵ月後	もらった絵本を，ぬいぐるみたちに見せながら読んでいることがある。	ぬいぐるみに読み聞かせる

総合考察

読書活動が向上しなかった理由は２つ考えられる。１つは，読書習慣が身についている子どもが集まったことである。本研究では，一般的に行われている方法と同じ様にホームページやチラシを用いて参加を呼びかけた。このような募集方法を用いた場合，情報が掲載される場所は育児関係に限られた。つまり，ぬいぐるみお泊り会の情報は，子どもに読み聞かせを日ごろから行っていたり，家庭内の読書環境を整えていたりするなど，読書の教育に関心のある保護者の目に留まりやすかったと思われる。実際に，本研究の参加群の読書活動傾向が非参加群の子どもに比べて高かったことを示す結果は，読書の教育に関心のある保護者の子どもたちが多く参加したことを示唆する。したがって，読書活動傾向の増加が見られなかったのは，参加した子どもたちの読書活動傾向がすでに高く，天井効果がみられたためと考えられる。さらに，本研究の結果は，全国で広く行われているぬいぐるみお泊まり会も，読書活動傾向が相対的に高い子どもが参加していることを示唆する。各地の図書館で開催されているぬいぐるみお泊り会の募集方法を見ると，先着順や抽選で参加が決定されていることが多い。読書に興味をまだ持つことができていない子どもや，これから読書に興味をもたせたいと思っている家庭の子どもが参加できるように，幼稚園や保育園のクラス単位で募集を行うなど，募集方法を工夫しなければならないだろう。

本研究では，ぬいぐるみお泊り会に参加した子どもの読書活動における量的な変化はみられなかった。しかし，数名ではあるが，自由記述において，自発的な読書の増加の他に，子どもがぬいぐるみに絵本を読み聞かせるようになったことや，これまで読まなかった絵本の読み聞かせを保護者に要求するようになったことの報告があった。これらの報告から，読書活動に関する回数の変化は大きくなかったとしても，読書活動の質的な変化があった可能性は残るため，効果はなかったとは言い切れないことに留意すべきであろう。したがって，今後の研究では，量的なデータに限らず，質的なデータも十分に収集した上で，再度，ぬいぐるみお泊り会の効果を検証することが望まれる。

読書活動が増加しなかったもう１つの理由として，読書活動を測定した方法の問題が挙げられる。読書活動を測定するために用いた質問紙は，保護者に回答を求めた。子どもが読書活動に関連する行動を行っていたとしても，保護者は育児以外に家事等も行っているため，読書活動の変化に気づけない場合もあったと思われる。また，保護者が回答する場合は，保護者の子どもに対する望ましさが排除できないことも考慮しなければならないだろう。以上のことから，読書活動を測定する際には，質問紙だけでなく，子どもが絵本を手に取ったり，絵本を開いたりするなど，実際の行動を第３者がカウントする行動観察も含めて行う必要がある。

幼児期はファンタジーや想像の世界に入り込んで素直に楽しむことのできる時期である（e.g., Woolley, Boerger, & Markman, 2004）。幼児期の子どもたちは，空想世界の出来事は現実世界でも起きると考える傾向にあるため，ぬいぐるみが絵本を選んでくれたことを疑いにくい。しかし，子どものファンタジーの世界に入り込む程度は個人差があるため（Carrick, Rush, & Quas, 2013），ぬいぐるみお泊り会が子どもに与えた効果には個人差があったと思われる。したがって，ぬいぐるみお泊り会はどのような子どもに対して効果があるのか，ファンタジーの世界に入

り込む程度との関係性について調べることも今後の課題である。本研究では量的な変化を検出することはできなかったが，読書活動に影響を及ぼしている可能性は残されているため，ぬいぐるみお泊り会の効果における結論は，本研究で得た知見を含めた方法で実施された研究を待たなければならない。

引用文献

秋田喜代美 (1992)「小中学生の読書行動に家庭環境が及ぼす影響」，『発達心理学研究』，3(2), 90-99.

Carrick, N., Rush, E., & Quas, J. A. (2013). Suggestibility and imagination in early childhood. In M. Taylor (Ed.), The oxford handbook of the development of imagination. (pp. 113-125). New York: Oxford university press.

国立青少年教育振興機構 (2012) 子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書 国立青少年教育振興機構 2012年2月23日 http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/72/ (2015年5月1日)

中村仁美・南部志緒 (2007)「ブックスタートの実態調査と効果的な実施方法についての検討」，『日本図書館情報学会誌』，53(2), 75-89.

Schleicher, A., & Tamassia, C. (2000). Measuring Student Knowledge and Skills: The PISA 2000 Assessment of Reading, Mathematical and Scientific Literacy. Education and Skills.

富田昌平・原充代 (2006)「幼児における空想と現実の区別の認識」，『幼年教育研究年報』，28, 51-59.

文部科学省 (2006)『読解力向上に関する指導資料：PISA 調査 (読解力) の結果分析と改善の方向』東洋館出版社

森俊之・谷出千代子・乙部貴幸・竹内惠子・高谷理恵子・中井昭夫 (2011)「ブックスタート経験の有無が子どもの生活習慣や読書環境等に及ぼす影響」，『仁愛大学研究紀要人間学部篇』，10, 61-67.

Pittsburgh Post-Gazette (2007). Tracking what happens when stuffed animals sleep over. (January 25, 2007)

須藤　文・安永　悟 (2009)「LTD 話し合い学習法を活用した授業実践の試み－小学5年生国語科への適用」，『協同と教育』，5, 12-22.

須藤　文・安永　悟 (2011)「読解リテラシーを育成する LTD 話し合い学習法の実践」，『教育心理学研究』，59(4), 474-487.

Wade B. & Moore, M. (1998). An early start with books: literacy and mathematical evidence from a longitudinal study. Educational Review, 50(2), 135-145.

Woolley, J. D., Boerger, E. A., & Markman, A. B. (2004). A visit from the Candy Witch: Factors influencing young children's belief in a novel fantastical being. Developmental science, 7(4), 456-468.

脚注

注 1.「カレントアウェアネス」(Current Awareness) は，図書館や図書館情報学に関する最新の動向を紹介・解説する国立国会図書館の情報誌であり，2006年からウェブサイト「カレントアウェアネス・ポータル」を開設している（http://current.ndl.go.jp/）。